

蘭領東インドにおける ロマンチック・ラブと近代家族： ジャワ女性の解放を希求したカルティニの視点から

青木恵理子*

Romantic love and modern family in the Dutch East Indies : From the perspective of Kartini, who longed for Javanese women's emancipation

Eriko AOKI*

Raden Adjeng Kartini and Raicho Hiratsuka are regarded as the first feminist in Indonesia and in Japan respectively. Since Kartini was born in 1879 and Hiratsuka in 1886, they lived almost in the same period of the world history. While they have many features in common, they differ from each other in many respects because the Dutch Indies (Indonesia) and Japan were not only socio-culturally different but also in quite specific positionalities in relation to the West and to modernity. On the one hand when they were about ten years old, they both started to question the social and political climate in which they lived. They kept criticizing and acting against the customs in order to improve the women's life. On the other hand, compared with Hiratsuka, Kartini was politically, socially and sexually much more restricted because she was born in a family not only aristocratic but also of the highest rank colonial officials among the colonized.

In a comparative perspective, this article aims at clarifying how romantic love and modern family were conceived and realized under the Western influence, by focusing on Kartini's struggles for improving the Javanese people's, especially women's, life.

In the late nineteenth and the early twentieth century, in which Kartini lived, the political economic situation in the Dutch East Indies greatly changed. As the infrastructure such as railways and roads and the communication network in Java rapidly developed, the Dutch colonial government together with European entrepreneurs established the political and economic control under the policy of liberal economy which had started in 1870. According to the expansion of the control and to the emerging liberal political and ethical trend, the Dutch government could not avoid educating the indigenous elites in order to make them colonial officials. About the same time, social and cultural changes also occurred. Since Suez Canal was open in 1869, it became easy to transport women and cultural artifacts from the Netherlands and other European countries. In addition to these political, economic, social and cultural changes, there occurred a fundamental transformation in another level, which I call the peripheralization of the sublime magic, as typically revealed in *Puputan* in Bali and the end of the poet institution in Javanese royal palaces.

Kartini was one of the first women who enjoyed the Dutch school education, although she had to leave the primary school and to be secluded in her father's homestead when she was twelve years old, following a Javanese aristocratic custom for unmarried women. During the customary seclusion, however, her eyes were open to the European world by reading books and journals in Dutch, receiving Dutch guests and being taught by Dutch tutors. With the modern ideology of emancipation, she criticized not only the colonial control but also the Javanese and Islamic customs such as the polygamy and the system of hierarchy deeply embedded in life. While she absorbed modern thoughts, she was also attracted not only to the Javanese mystic culture but also to Theosophy and spiritualism introduced by Europeans. It seems that the sublime magic which had been peripheralized in the public sphere was vital or revitalized in the private sphere.

* 龍谷大学社会学部

It is quite probable that she understood well what the romantic love and modern family were in the West modern world. While she bitterly criticized the polygamy, concubinage and hierarchical relations among Javanese siblings, her criticism of the relationships between Javanese husband and wife and between father and children was quite limited. It is because the contradicting issues of love were seated at the kernel of what prevented her from severely criticizing these relationships. Through this contradictions, she was caught not only in Javanese costumes but also in modern values.

はじめに

桑原桃音による平塚らいてう（以下平塚）に関する論文と本稿は、それぞれ日本とインドネシアにおいて、婦人解放運動の先駆者とされる平塚とラデン・アジェン・カルティニ Raden Adjeng Kartini（以下カルティニ）の思想と行動を対比することにより、西洋近代に端を発する「ロマンチック・ラブ」と「近代家族」が、それぞれの社会においてどのように萌芽したかを考察することを目的とする¹⁾。

平塚は1886年2月10日生まれ、カルティニは1879年4月21日生まれ。年齢の差は7歳弱である。絶対年代を軸にして考えれば、二人はほぼ同時代を生きたことになる。婦人解放思想・運動の先駆者と呼ばれる二人は、共通点をもつと同時に、極めて多くの相違点をもっている。二人はともに、アジアの一地域に生まれ暮らし、西洋近代の女性解放思想に注目しつつ、社会的非難を受けていることを自覚しながら、自を賭けた生の抵抗と模索を切実に展開した²⁾。しかし一方で、それぞれの社会・文化・政治・歴史的状況の違い、さらにそのなかでの位置づけや立ち位置のちがいに由り、彼女たちの女性解放思想の焦点は異なったものとなっている。

彼女たち自身による著作、彼女たちに関連する文献などを基本的なデータとして、彼女たちの生の軌跡をたどることにより、「ロマンチック・ラブ」と「近代家族」という西洋近代に生まれた理想が、彼女たちそれぞれの模索と抵抗のなかでとった独自の実践の形を比較する。それは、個人の生に密着した比較ではあるが、彼女たちが、当時の社会環境に対峙しながら前人未到の領域を切り開こうとしていたことにより、当時の社会の恋愛・結婚・家族のあり方を、逆照射することができよう。また、その後現在に至るまで、それぞれの生が日本あるいはインドネシアの社会のなかで繰り返し主題化されてきたことにより、現在における「ロマンチック・ラブ」と「近代家族」について考察する上でも、意義があるといえよう。

近代社会の研究は一般に、近代固有の恋愛の形態が、西洋の歴史的コンテクストのなかで生まれたとする。コンテクストとは、西洋近代の社会の構成であり、構成化の力であるが、西洋世界においてさえ、実現のされ方は、地域的にも歴史的流れの中でも、それぞれ固有の形態をとった。非西洋世界への西洋人の進出とともに、そのような構成化の力は、日本及び蘭領東インドにも及ぶこととなる。それらの地域は、西洋世界と、さらに相互に、歴史・文化・社会・宗教的に大きく異なるため、現実の形態には強い固有性が顕れたのではないだろうか。また、両地域にとって西洋世界は、知識と思想および抑圧の源泉であったが、主として植民地化の有無により、西洋の知識と思想との関係および抑圧の形態が異なっていた。このことから、両地域での思想やその実現の形には共通点と同時に大きな相違があったであろう。

西洋でも、非西洋世界の近代化の流れのなかでも、近代的恋愛および家族観は、それが唱えられ始めた時期においては、現状を改善してゆくための普遍的な価値をもつ参照枠として主張された。

非西洋世界においては、西洋世界に起源を持つ思想によって自らの文化社会的伝統を批判改変して行くということが露になったときに、恋愛と家族という私的領域の理想が民族主義 *nationalism* という公的領域の思想との間にねじれを孕みうる。若き彼女たちが生きた世紀の変わり目は、日本とインドネシアいずれにおいても近代的西洋的な教化とともにナショナリズムが広がりをもっていった時代であった。彼女たちがそれぞれ、そのねじれをどのように生きたかについても考察する。

恋愛と家族の問題は、社会全体を優位な公的領域と劣位な私的領域へと下位区分する社会構成および構成力の力と深くかわる。女性が自ら進んで私的領域に身を投じるよう女性たちを魅了し、女性を周辺化する近代の社会構成を再生産する装置という批判をこめて、近年のフェミニズムは、ロマンチック・ラブ・イデオロギーという用語を用いる。ロマンチック・ラブが自由への希求の参照枠とされ始めた時代においては、この批判は必ずしもあてはまらない。本稿は、近年のフェミニズムのまなざしに配慮しながらも、若き平塚とカルティニの模索・抵抗・葛藤に立ち現れる西洋近代的な社会構成と伝統的社会構成のせめぎあいについても考察する。

第1章 歴史的な位置付け

1886（明治19）年2月10日に生まれ、1971年（昭和46年）5月24日に85歳で没した平塚は、明治・大正・昭和の激変する歴史を生きた。カルティニは、1879年4月21日に生まれ1904年9月17日に25歳で没した。彼女たちの生涯の長さには、60年間の違いがある。双方、考え方にゆれや葛藤があり、一生を通してみると大きな変化があった。とくに長寿の平塚は、時代状況やライフステージの変化を背景として、一生の間に、その思想と実践も大きく変化させた。

既述のように、本稿と桑原の論稿は、彼女たちの生の抵抗と葛藤を鏡として、それぞれの帰属社会におけるロマンチック・ラブと近代家族の萌芽を照らし、比較する。適切な比較ができるように、彼女たちの生が相互参照できるような時期に限定して考察を行う。後に彼女たちが自ら回想するところによれば、双方とも10歳前後に、それぞれが帰属する社会に対し疑問を抱いた。その後、彼女たちの生は、帰属社会からの非難を巻き起こしながら、女性解放のための一貫した思想と実践の形式を求める、激しい抵抗と葛藤の軌跡を描く。しかしやがて、結婚や出産を契機として、その激しさは緩和され、現実へのある種の適応を果たし、実現可能性の高い思想と実践を模索して行く。カルティニは、まさにその時点で夭逝し、平塚は、パートナーの看病や子育てなど、しばしばまごまとした現実生活に対応し、その後大きく軌道を変えてゆく。

この章では、現実生活に対応し始める時期までのカルティニの一生が展開された歴史状況を明らかにする。

1. 政治経済的転換期

多くの研究者が、カルティニの生きた時代は、狭間の時代、歴史的過渡期であったという。19世紀から20世紀の初頭にかけて、オランダによる東インドの植民地化は量的にも質的にも進展した。経済的利益を安定的に拡大し、対象地域を広域化していくために、一方においては、ヨーロッパ勢力との交渉調整を行い、他方においては、軍事力を用いた植民地支配の確立をおこなった。1824年には、イギリスとの間に条約をかわし、マレー半島からのオランダ人植民居住地の撤退、スマトラ島からのイギリス人植民居住地の撤退が行われた。1858年には、ポルトガルとの間に条

約を結び、カトリックの布教と植民地支配の圏域に関して取引が行われた。また、1820年から60年代にかけて、ジャワ、スマトラ、カリマンタンで戦争を行い、それぞれの地域の有力な王権をオランダ植民地政府に従属させるようになった³⁾。また、19世紀の末から20世紀の初めにかけて、その他の多くの地域に対して軍事遠征を行い、オランダ植民地政府の軍事力と権力を、それぞれの地域において誇示した。19世紀初頭までは、オランダ植民地政府の関心は、ジャワ島、スマトラ島の一部、バンカ島などに限られ、現地勢力との関係はビジネスパートナーという色合いも濃かった。以上のような戦争や軍事遠征によって、支配被支配関係となり、広域な地域が植民地行政下にはいった。ほとんどの場合、当時の現地の人々にとって、オランダの軍事行為はなんら正当性を持つものではなかった。しかしながら、オランダ軍人と政治家たちは、抑圧的で、野蛮で、法を知らない現地支配者から人々を解放する倫理的責任からなされた戦いだと主張した⁴⁾。

2. 歴史的転換のもう一つの水準

19世紀から20世紀初頭にかけてインドネシア諸島に起こった軍事政治的变化は、オランダによる支配の確立だけではなかった。1906年と1908年にバリで起こったププタンに典型的に示されているように、インドネシア諸島における軍事政治的中心には、崇高な呪術性と呼べるようなものがあったが、それが排除、あるいは周辺化されたという変化である。ププタンは、以下のように起こった。王に率いられた一族の者たち、ヒンドゥー僧侶、従者や平民たちが、銃を構えたオランダ軍の前へとしつと進んでいった。彼らはみな、正装し宝石で絢爛と身を飾っていた。オランダ軍の間近まで来て、彼らの行進は歩を止めた。王が合図をすると、僧侶がクリス（波状の剣）で王を刺し、その命を絶った。これを合図に、付き従ったものたちすべてが、互いに、あるいは自らを刺し、次々と死んでいった。この間、恐れおののいたオランダ軍の兵士の何人かは、攻撃する恐れのない、美しく着飾った人々に対して発砲した。華麗な行列は、累々とした死者の群れと化した。オランダ軍兵士は、死者たちの身に付けている宝石を、奪った。宝石は、崇高な呪術性を創るものから、たんなる財へと変換された。

ププタンの字義は「終わり」であるが、英語では一般に *ritual suicide*, *mass suicide*, *suicide march* などと訳される。「戦っても勝つ見込みのない場合に、屈辱を回避し、名誉を守るためになされる儀礼性を帯びた集団的な自殺」と解釈されている。しかしながら、あらゆる社会や文化において、自ら命を絶つことあるいは、仲間同士お互いの命を絶ちあうことが、強烈な宗教的倫理的判断の下に置かれていることから考えても、「儀礼性を帯びた、集団的な自殺」といういかにも価値中立的な記述は、ププタンに関して、ほとんど何も語っていないことに等しいのではないだろうか。人類学の解釈学的発展に寄与したギアツ Geertz は、その著書 *Negara* において、19世紀におけるバリのヌガラ *negara* という政体を、「劇場国家」、無限の時空に展開するヒンドゥーの神々の秩序を映し出すもの、人々の生活がそれにしたがって営まれるものとして描き出した。ププタンはまさに、劇場国家の最期を標す、華麗な出来事であったと、ギアツは位置づける (Geertz 1980)⁵⁾。

ププタンという現象を前にして、社会科学は、西洋世界で使い慣らされた概念、たとえば *state*、によって、それを理解しようとする。それは、確かにある種の理解を可能にするのだが、バリのヌガラのもっとも重要な部分はそのそこから抜け落ちてしまうとギアツは指摘する。ヌガラの中心である王は、非活性で静寂であることそのものによって、宇宙の中心である神々の力に社会全体をつなぐ

ことができる (Geertz 1980: 130)。宇宙的な力によって活性化する、空なる中心を持つ社会というあり方は、インドネシア諸島の各地で見出される (Fox 1980; Aoki 1996; 青木 1986)。オランダ植民地政府は、1901 年から 1910 年にかけて、インドネシア諸島の外領各地に対して、軍事遠征を次々と行っている。これにより、政体の中心が、常に崇高な呪術性を孕んでいた世界から、単なる人間の力の中心、物理的な力を操作する指令の始点とされる世界への移行が、少なくともある水準において、インドネシア全体で起こったのではないだろうか⁶⁾。

3. ジャワにおける歴史的転換

外領が 19 世紀後半から 20 世紀にかけてようやくその統治下に繰り入れられて行ったのとは異なり、ジャワ島はオランダ植民地政府と抜き差しならない関係を 17 世紀以来続けていた。ジョクジャカルタとスラカルタそれぞれの王侯貴族は、オランダ植民地政府によって、さまざまな特権を与えられていた。一方において、ジャワ島は、オランダ植民地政府が利益を吸い上げるための直接の対象となっていたので、抗戦蜂起が繰り返されていた。しかしながら、1830 年のジャワ戦争をもって、王族を中心とする蜂起は最後となったとされる。その後、近代的な民族の抵抗が醸成される 1920 年代までの間は、崇高なる呪術的中心性が失われてゆく内部的变化がジャワの王侯貴族の社会に進行していった。その変化を、明示的に示しているのが、最後の宮廷詩人であるロンゴワルシトの詩である。彼が、後継者を指名することなく、1873 年に逝去したことにより、ジャワの崇高なる呪術的中心を謳う伝統が途絶えた。『狂気の時代の歌』と題された彼の長詩は、誰が悪人というのではなく、皆がそれぞれの義務と善行を行っているのに、世界が不可避免的に破滅に向かってゆくという、社会を襲っている深い宇宙論的危機を歌っている (永積 1980: 23-25)。

時をほぼ同じくして、オランダ植民地政府の官吏でもあった、バタヴィア生まれのオランダ人文学者、ロールダ・ヴァン・エイシンハによって『呪いの歌—ジャワにおけるオランダ人たちの最後の日』という詩が作られた。ジャワ王族の最後の抵抗戦の武将セントットの仮名のもとに発表されたこの詩は、不当な搾取を行ってきたキリスト教徒であるオランダ人と、復讐に燃える崇高なるイスラム教徒という対立の中に、オランダ人の最期を予言するものとなっている (永積 1980: 25-31)。そこには、太陽が登場するが、それは、宇宙論的な危機感を暗示するものではなく、不正と復讐の対立劇の象徴でしかない。表面的には、「時代の終焉」を歌うという点において『狂気の時代の歌』に類似しているが、『呪いの歌』は、崇高なる呪術的中心をもつ世界観とは相容れない。それは、明らかにその後世界的に人々を捕らえてゆく、カテゴリー・ポリティックスと、その間に展開される強迫的な暴力を予兆するものとなっている。

ロールダ・ヴァン・エイシンハは、1860 年に植民地官吏としてジャワに赴き、商品作物の強制栽培政策によって引き起こされた村々の荒廃ぶりに胸を突かれたとされる。『呪いの歌』は、その時作られたものといわれている。強制栽培政策はパドリ戦争やジャワ戦争の際のオランダの出費を埋め合わせるべく 1830 年からジャワにおいて施行され、オランダには莫大な利益をもたらしたが、農民の搾取を余儀なくし、1840 年代には飢饉が繰り返しおこった。オランダ国内の批判もあり、強制栽培政策は廃止され、1870 年から、自由政策に切り替えられ、個人のプランテーション経営が自由化され奨励された。しかし、農民が飢餓状態におかれるという事態は変わらず、政治的な強制力による搾取から、資本主義経済システムによる効率的搾取にきりかわったといえるだろう

(Vickers 2005)。オランダ人企業家のプランテーション経営を盛んにした背景には、19世紀後半に目覚ましかった、国際的な交通網の発達、ジャワ島内での交通・通信網の発達があった (Reitsma ed. 1925; 土屋 1984)⁷⁾。1869年にスエズ運河が開通したことにより、東インド (インドネシア) に移住するオランダ人女性の数が増加するのに並行して、オランダ人とジャワ人を両親とするユーレシアンの人々も激増していった (土屋 1984)。言い換えれば、オランダ植民者の生活は、家族化し、次世代へと家族文化が継承されてゆくという将来の描けるものに変化していった。オランダ植民者にとっての時間は、任期という行政的な時間から、家族生活によって彩られた時間へと変化した。同様に、東インドは、行政や政治経済活動の領域としての「空間」から、生きられた「場所」へと変化していった。

ユーレシアンの激増とともに親密圏で民族的混淆が起きていたように、公的領域においても民族的混淆が起きていた。18世紀までは、ジャワのマタラム王家に由来するプリアイ層 (王侯貴族層) は、オランダ植民地政府にとって、交渉相手であったが、19世紀前半から、次第にオランダの教育の対象となり、植民地官僚として繰り込まれていった。学校教育の過程では、ジャワ人プリアイとオランダ人が机を並べた。カルティニも、そのような植民地政策の一環として、6歳から12歳までオランダ人の女生徒たちと学校生活を共にした。学校での成績がどうであろうと、長じると、プリアイ達は、オランダ王室を象徴的頂点とするヒエラルキーのもと、オランダ人上流階層の下に位置付けられた。

文化の面からも、混淆は見られた。プリアイ層は、一方において、ジャワ宮廷文化の担い手であり、保護者であったが、同時に、ヨーロッパ的文化の模倣に熱心だった (Sutherland 1979)。また、東インド在住のオランダ人も、ジャワ宮廷文化の鑑賞を楽しみ、日常生活の衣食住にもジャワの文化を取り入れていた。このような文化の混淆は、私的領域にとどまるものではなく、公式な式典や、オランダ人、ユーレシアン、現地人など多様な文化的・民族的背景を持つ人々を巻き込んだ社交の場という、公的領域にも起こっていた。さらに、匿名性の高い都市空間の出現とともに、混淆的な音楽、演劇、絵画が広く流通するようになった (土屋 1984, 1991)。

例えば、カルティニおよびそのすぐ下の二人の妹たちは、ジャワの自然を近代的なまなざしのもとに甘味な鑑賞の対象として描いていた。土屋は、その著書『カルティニの風景』(1991)において、カルティニにおける近代的な自己の成立を、東インド、より限定的にはジャワにおける風景画の出現と関連付けて考察している。それまでのジャワ人にとって世界は崇高な呪術性を宿したものであり、自然とそれを観る人間 (社会) からなるものではなく、ロンゴワルシトが歌うように、人間の生と木々、鳥、山川は不可分のものとして生きられていた。崇高なる呪術性は、政治や軍事において、カテゴリー・ポリティクスと単純明白な暴力によっておおわれてゆくように、個々の人々の感覚においても、近代的自己と対象としての自然の成立によって押し隠されていった。

自由主義的経済搾取と社会的混淆 (メスティーソ化またはクレオール化) の進むなかで、1901年にオランダ女王によって「倫理政策」が打ち出される。地方支配者に抑圧された貧しく「遅れた原住民にも文明の恩恵を」というミッションのもとに展開された倫理政策は、自由主義的経済搾取や軍事遠征を推進するものでさえあった。しかし同時に、「遅れた原住民」は、学校教育を通じて、西洋近代的なものの見方を適用し、オランダ植民地統治の正当性・正統性を疑問に付し、抵抗の正当性を獲得してゆくことになる。カルティニの生は、そのような時代へと向かう端緒に位置してい

た。

この章の最後に、比較の視点を加えておこう。カルティニの生きた時代は、インドネシア史の観点からみると、オランダによる植民地化の強化から独立運動の本格化への過渡期、近代的な思想を修得した「民族（のちの国民）」のリーダーが現れる新しい時代への過渡期であった。若き平塚の生きた日本では、近代的暴力を備えた欧米との出会いにより江戸期の政治体制が革命的に変貌し、暴力的脅威を受ける側から、植民地支配も含め、暴力を行使する側に変容していく、近代史の過渡的時期にあたるといえよう。

第2章 西洋近代と民族伝統

社会主義者で女性解放論者のステラ・ゼーハンデラールに宛てて書かれた1900年1月12日付の長い手紙の締めくくりの部分で、カルティニ自身「まったく、この時代に生きるのはほんとに輝かしいことです。古い時代から新しい時代への過渡期に。」(Kartini 1964: 63)と述べている。彼女は、古い時代と新しい時代をどのように位置づけていたのだろうか。同じ手紙の彼女自身の言葉によれば彼女のいる時代とは、「ジャワ人自身が自らを解放する (Kartini 1964: 63)」時代である。しかし、彼女にとってそれは、民族伝統を離れ、西洋近代の世界に移行していくことではなく、西洋の解放思想に学びながら、解放されたジャワ社会に移行してゆくことを意味している。解放の中心に位置付けられているのが、女性とジャワ人或いは東インド（インドネシア）人である。この章では、以上のような事柄の詳細をたどる。

1. カルティニを知るための資料

私たちに与えられているカルティニを知る資料について説明しておこう。カルティニは、平塚や「青鞥」に集った女性たちとは異なり、公に執筆する機会を例外的にしか持たなかった。それにもかかわらず、彼女の思想に関して多くの研究が可能であったのは、彼女が大量の手紙をオランダ語で書き、それが保管されていたからである。手紙の受け取り手はすべてヨーロッパ人。総計10人⁸⁾。そのほとんどがオランダ人である。すべての手紙は私信といってよいが、多分に第三者の存在を意識して書かれているといえるだろう。

彼女の死から7年後、東インド植民政庁の教育宗教産業長官を務めていたJ. H. Abendanonによって、1911年にオランダで、彼女の書簡集がはじめて出版された⁹⁾。オランダでの東インドに対する関心が高まるなか、*Door Duisternis tot Licht* 『闇を越えて光へ』とアベンダノンによって題されたこの書簡集は、多くの読者を得、その後、版を重ねてきた。また、英語、フランス語、インドネシア語、日本語（インドネシア語版からの重訳）などに翻訳されてきた（富永1991）。その題名が暗示するように、アベンダノンは、書簡集を出版することによって、カルティニがオランダ語の修得とオランダの学校教育によって、啓蒙された人物であったことを世に知らしめようとしたことが推測される。オランダの教育を受けたことと、オランダ語で書かれたあるいはオランダ語に翻訳された雑誌や書物を介してヨーロッパ世界へとつながっていたこと、ヨーロッパ人との直接のおよび手紙を通じた間接的交流があったことにより、カルティニが、個人および民族の自由と自立を基盤とする近代的な思想、さらには近代的自我を獲得していたとする見方が研究者の間でも一般的である。カルティニをインドネシア最初期のフェミニストおよび民族主義者とする議論は、この見方

に基づいている。しかし本稿では、カルティニの葛藤、抵抗、模索に肉迫するために、このような一般的な見方を棚上げし、伝統と近代という時間的に一方向に展開するとされる差異、東インド（後のインドネシア）と西洋（またはオランダ）という空間的非時間的であるとされる差異のフレームワークに批判的なまなざしを向けながら、カルティニの手紙のなかの発言と息づかいをたどってゆく。

2. 学校教育と慣習

既述のように、カルティニは、6歳から12歳半までオランダ人女子たちと机を並べてオランダ式の学校教育を受けた。そのことをカルティニは誇りに思い、自由であった懐かしい時期として、繰り返し手紙のなかで言及している。彼女は、12歳半を迎えた時に学校教育をやめ、婚前閉居を経過した後に、手紙を書くという習慣を始めた。婚前閉居とは、ジャワ貴族（プリアイ）の女性に課された習慣である。12歳から結婚までの間、女性は、屋敷地内で生活しなければならないという慣習である。

カルティニはステラへの手紙のなかで次のように述べている。ともに机を並べて学んだオランダ人少女レツツイとの人生航路の違いを思い知らされた、学校教育終了以前に起きた出来事を、三人称を使って記述している。カルティニは「褐色の少女」、レツツイは「ブロンドの少女」と描かれている。褐色とブロンドの対比は、人生を形づくる二つの時間枠（ジャワ慣習の繰り返しの時間と近代の前進的な時間）の対比、人生の形づくりかたの二つのタイプ（慣習によるものと自己選択自己決定によるもの）の対比、移動の禁じられた婚前閉居と移動の自由という空間的対比を際立たせる。

校庭で、フランス語の勉強をしているレツツイに、「フランス語は学校の勉強でもないのだから、本を閉じてお話ししよう」とカルティニが話しかける。レツツイは答える。「フランス語ができないと2年後にオランダの「普通学校」に行くことができないの。「普通学校」を出たら、多分ここに戻ってきて、学校の先生になるの。いま私たちの先生が立っているあの場所に私は立つの」と目を輝かせた後、カルティニに尋ねる。「ニー¹⁰⁾は、大きくなったら何になるの。」カルティニは、今まで考えたこともなかった質問に衝撃を受け、気もそぞろになる。家に帰り、父のところに真っ先に行き尋ねる。「私は大きくなったら何になるの？」父は微笑みながらやさしく娘のほほをつまむ。そこに、長兄が帰ってきて、彼女の質問に迷わず答える。「ラデン・アユ（身分の高いジャワの既婚女性を指す名称）さ。」答えを得た幼い彼女は、ほっとするが、そのあとこの名称が頭を離れなくなる。知り合いのラデン・アユの様子や生活を注意深く観察しているうちに、ラデン・アユになるということ、つまり、自分でいつ、どこで、誰と、どのように結婚するかを選ぶこともできず、必ず結婚しなければならないという、ジャワの古代からの鉄則に、むらむらと反感が湧き上がるのがわかった（Kartini 1964: 70-71）と手紙に記している。

婚前閉居の場所であった彼女の父の屋敷は、住居としては申し分ないものであったが、「黄金の檻も檻には違いなかった」と手紙の中で嘆息する。オランダ式学校教育は終わったものの、その後オランダ語、フランス語、ヨーロッパの刺繍や風景画を教えるオランダ語の家庭教師の訪問、オランダ語でやり取りされる手紙、アベンダノン夫妻のようなオランダ植民地政府の要人の訪問、オランダの書籍や雑誌だけではなく、オランダ語訳されたヨーロッパのほかの国で出版された書籍を読

みふけるなど、オランダおよびヨーロッパ世界一般とのつながりの重要性は増したといってもよい。それらの交流や書籍や雑誌から、彼女自身の解放と東インド（インドネシア）——外領は言うに及ばず、ジャワの一般社会を知る機会はほとんどなかったので、ジャワのプリアイ社会が彼女にとっての東インドのイメージになっているが——の解放、特に東インドの女性の解放のための理論とイメージをえることになる。

1895年、16歳の年にカルティニは、二人の妹とともに、父の裁量により婚前閉居を解かれた。さらに次の年には、オランダ女王の戴冠記念式典に出席するために、彼女たちは生まれて初めて、居住していた町ジャバラを離れる機会を両親から許されることになる。このような出来事、つまり未婚の若い女性が公衆の面前に現れることは当時のプリアイ社会では前代未聞のことであった（Kartini 1964: 33）。未婚の女性の姿が屋敷外でみられることだけではなく、未婚の女性の名前が出版物に掲載され、ましてや、彼女の意見を表明する記事が掲載されることは、避けられるべきことであった。彼女の外出の機会同様、彼女の名前が印刷物に掲載されたのも、オランダ人との人的関係を介してのことであった。

1902年、オランダ社会民主党員であったペンパルのステラが仲介することにより、当時同党の党首であった、ファン・コル H. H. van Kol によるカルティニ訪問が実現した。彼の党首としての政治的意図は、カルティニのような進歩的なジャワ女性の出現をオランダによる植民地化の成果として政争に利用し、保守的多数派に対抗しようというものであったという（Geertz 1964: 16; 永積 1980: 83, 196-7）。ファン・コルは、カルティニ訪問の際にロコモティヴ新聞の記者を伴っていた。彼女の名前は、その記者の書いた「ジャバラ紀行」に記された（Geertz 1964: 17）。

オランダ（植民地）政府の公式行事へ出席し、出版物に記されることにより、広い範囲の進歩的なオランダの政府関係者や知識人、さらに、オランダの高等教育を受けたインドネシア知識人がカルティニの存在を知るようになる。彼らそれぞれの直接的間接的助力により、カルティニの二つの念願、一つは、自らがさらなる教育を受ける機会をもつこと、もう一つは、ジャワ女性の自立のための学校の建設という念願にむけて、事態は徐々に進んでいった。しかし同時に、ジャワだけでなくオランダの保守的な人々から、ふしだらであるとか、オランダ人と結婚しようとしているといった、当時としては辛辣な性的な非難が投げつけられることになる。それは、彼女だけでなく、彼女の父親を苦悩させることになり、やがて病に伏した父親を慮って、長い間断固として拒否してきたプリアイの伝統にのっとった結婚を、父の意向に従って、受け入れることになる。アベンダノン教育宗教産業長官は、カルティニのためのオランダ留学の奨学金をおぜん立てすることができたが、性的な非難の渦中にあるカルティニがオランダに行くことは、避けるべきだと考え断念する。それに代えて、アベンダノンは、カルティニが妹と共にバタヴィアへ留学するための奨学金を提供しようとした。カルティニはすでに結婚を決めていたために、彼女の意向により、その奨学金は、スマトラ出身で、後のナショナリストのリーダーのひとりであり、独立後に外務大臣を務めることになる、アグス・サリムに与えられることになった。この出来事は、彼女の民族意識が、ジャワというカテゴリーよりも広いものになりつつあったことを示唆しているといえよう（永積 1980; Geertz 1964: 15-16）。留学は、断念したものの、もう一つの教育の夢、女子教育、女性の自立を可能にする学校教育には、アベンダノンのサポートのなか、着手することができた。1902年における、ジャワ・プリアイの娘たちための私塾をジュバラに開設した（富永 1991: 52）。しかし、それも、

出産4日後の彼女の夭逝により継続不可能となった。

彼女の人生の最後の段階を指して、永積は、「挫折」とよぶ（永積 1980：83）。それとは反対に、現代のインドネシアのイブイズム（母親主義）¹¹⁾を信奉する人々は、物事への理解と自覚の足りなかった若者時代を後にし、成熟した理解と自覚を持つようになった出来事として評価する。また、現代の欧米的なフェミニズムのまなざしは、彼女の父親と、植民地体制のなかで彼の上位者にあたるセイトホッフという人物がそれぞれの生きた人的頂点をなしている、ジャワの伝統社会と西洋の植民地社会という、結合した二つの家父長制の抑圧の結果であるとする（Cote 1992：x-xi）。彼女の書簡集は、ぶれないカルティニ像を結ばせるためには、豊すぎると同時に情報としては不十分であり、いずれの解釈も可能にする余地をもっている。

彼女の人生、特にその最後の段階をどのように評価するにしろ、学校教育は常に彼女の考える「ジャワ（プリヤイ）女性」と「（ジャワ）民族」の解放を可能にする希望を託すものであった。彼女の属する社会が階層的に構成され、その頂点は、ジャワ宮廷ではなく、オランダ政府にあると位置付けていたカルティニであったが、そのような階梯を上昇しようとする意図は、書簡集を見る限り全く見受けられない。彼女の教育の目的は、ジャワ（東インド）の解放であった。彼女は、ジャワ人であることに、ジャワの言語文化に、誇りを持っていた。同時に、一部の中心的慣習——とくに結婚制度——は抑圧の源であり、その変革は、彼女自身とジャワ女性の解放のためのターゲットとなっていた。にもかかわらず、父と同じ階級のジャワ人官吏の後妻になることを受け入れた原動力の中心には、父との愛に満ちた関係がある。この関係こそが、彼女を、解放思想の観点からは限界を画し、彼女の生に寄り添う視点からは、西洋解放思想とジャワ・プリヤイ慣習、女性解放と民族解放、オランダ社会における女性の自由と抑圧など、様々な矛盾を生き抜くことを可能にしたよりどころであった。

3. 西洋解放思想とジャワ人としての自覚

12歳半で始まった婚前閉居。父の裁量により、16歳でそれが解かれ、徐々に彼女の行動範囲は、広がっていったが、常に行動には抑制が要求された。それは、ゆっくりとした身のこなし、聞き取れないほどの小さな声、声や歯を露わにしない笑いなどという、立ち居振る舞いのエステチックに埋め込まれた抑制にも通じていた（富永 1991：36；Kartini 1964：82）。その短い一生の最後の段階において、さらなる抑制を必要とするような、ジャワ慣習に従った生活形態を自ら選び取る。行動の抑制に満ちた彼女の一生にとって、解放を謳うオランダ語の印刷物は、趣味、教養、知識以上の意味があった。

既述のように、19世紀後半は、東インドでの交通網の発達、スエズ運河建設後のオランダ人人口の増加にともない、東インドへ送られてくる印刷物の量が格段に増えた。カルティニの読書はそのような時代状況によって可能になったといえる。カルティニがどのようなものを読んでいたかについては、富永による緻密な研究がある（富永 1991）。富永は、編集の異なる二つの書簡集 *Door Duistenis tot Licht* 『闇を超えて光へ』および *Brieven mevrouw R. M. Abendanon-Mandri en Haar Echtgenoot* 『アベンダノン夫人とその夫への手紙』を資料として、カルティニが読んでいた印刷物を明らかにしている。その二つの書簡集からだけでも、カルティニがかなりの量の読書をしていたことがわかる。また、多くの読み物を父親やオランダ人の知り合いが彼女にあたえてくれていたことが

手紙の中で述べられている。

19世紀以降、東インドでもほぼリアルタイムでオランダ語書籍、雑誌、新聞を入手することが可能となり、東インド人がその読者となる時代が到来していた。そのような世代に属すカルティニは、ヨーロッパ世界で「新しい女」たちが登場し、多くの女性作家が輩出された時代における女性解放思想にリアルタイムで共振し、変革のヴィジョンをもつにいたった。同時に、東インド、オランダ植民地主義を主題化したものを通じて、ジャワの文化や自然をジャワ人とオランダ人の目を併せ持って見、民族自尊と解放の思想を形成するようになった（富永 1991：53）。様々な形で抑制された彼女の生活にとって、読書はまさに、生命の光を与えるものであった。同時に、読書を通じて彼女は、ジャワ社会に批判の目を向け、植民地体制の矛盾を非難する思想を得た。

例えば、ジャワ社会の位階制、それを支えている言葉づかいや立ち居振る舞いの体系への痛烈な批判が、手紙のなかでも述べられている。同じ家にくらす兄弟姉妹であっても、年長者に対して年少者はそのような振る舞いが要求されることへの憤懣が手紙に記されている。この位階的な人間関係への変革の一環として、彼女は、二人の妹と同じ部屋で暮らし、平等で親密な関係を持つことを実践した。また、王家につながる身分の高さをないものと考えてくれるよう、ラデン・アジェンという敬称を使わず、単にカルティニと呼ぶよう、文通相手を促している（Kartini 1964：36）。

カルティニはまた、ジャワの位階制の上にオランダの植民地体制が接合されていることを様々な点から批判している。オランダ人の役人たちが、自分達をジャワ人の上に置くために、ジャワの位階制を支える、言葉づかいや象徴的品々や態度の体系をジャワ人に対して適用していることの愚かしさを指摘し、オランダ人と机を並べ、最高の成績を収めても、植民地体制の中では、ジャワ人はオランダ人の部下になることしかできないことを批判している。

彼女の批判はジャワ社会および植民地社会の位階制に向けられるが、前者の要となっている父親に対しての親愛を語り続け、文通相手のオランダ人女性たちに対しても親愛の情を表すことを怠らなかった。もし彼女が夭逝しなかったら、オランダ植民地政府への激しい抵抗と独立の武力闘争に巻き込まれることになったであろう。彼女が、父親を慮って結婚を決心したことから推測すると、独立闘争に巻き込まれたとしても、文通相手達への親愛の情を優先して、独立闘争への直接的参加は回避し、その一方で彼女自身の抱える矛盾は大きくなったのではないかと推測される。

オランダ人との交流は、ヨーロッパの解放思想とそれに基づくジャワ社会の批判へとカルティニを導いたが、同時にジャワ人としての自覚をはぐくむきっかけとなっていた。彼女は、ジャワ人としての自覚を、ジャワの自然と文化の美しさを語ることによってあらわした。

私たちの心はジャワ人というよりヨーロッパ人に近いと言われることがあります。悲しむべきことです。確かに、私たちは、ヨーロッパの考え方や感じ方に影響を受けています。……でも血は、私たちの血管を流れる生き生きとした温かい血は、決して死ぬことはありません。私たちはそれをお香の香りや花々の芳しい香り、ココヤシの木々の頂をわたる風の息づかい、鳩の鳴き声、稲の稔った水田のささやき、収穫期に聞こえる杵を打つ響きの中に感じるのです（Kartini 1964：111）。

それ（*gamelan*：ジャワの伝統音楽）は、ほかのどんな歌とも異なります。——どんなメロ

ディーとも。一つ一つの音がこの上なく柔らかく、優しく、かすかにスリリングで、変化にみちています——ほんとうに、あらがうことできない魅力を持ち、痛いほど美しく。それは、単なるガラスや銅や木の響きではなく、私に話しかける人々の魂の声です (Kartini 1964: 50)。

植民地体制のもつジャワ人に対する抑圧性を語ることによってだけでなく、ジャワの自然と文化を、文通相手に理解可能な形で、オランダ語によって語ることを通じて、カルティニのなかに、ジャワ人としての、さらに、「東インド」人としての自覚がはぐくまれたと言ってもよいだろう。自然や文化に対するこのような経験の形成とその表現は、出来事に民族集団名を刻印することに通じ、深いところで、近代的な政治行動を支えている¹²⁾。

4. 宗教と神秘主義

ロールダ・ヴァン・エイシンハ¹³⁾がしたように、オランダ人（或いは植民地政府）とジャワ人（或いは東インド人）の関係は、キリスト教とイスラム教の対立ととらえることが多い。ヨーロッパ人とジャワ人の対立関係は、当時マレー語で書かれた現地人向けの大衆文学でも、同様にとらえられている¹⁴⁾。オランダ／西洋とジャワ／東インドに対して、何重にもねじれた関係にあったカルティニは、宗教をどのように捉えていたのだろうか。

一夫多妻婚を正当とするイスラム法には何度も批判を投げかけている。ジャワの人々がイスラム教徒であるのは、祖先がそうであったからにすぎないので、イスラム教が禁じているにも関わらず、飲酒や、さらに悪いことに、アヘンの習慣がはびこっていることを嘆いている (Kartini 1964: 34)。そして自らがイスラム教徒であるのも、同様の理由であるとのべる。さらに、一般的にイスラム教徒であることは、いくつかの弊害を持っていることを手紙のなかで訴えている。イスラム教は、他の宗教の人たちにイスラム教のことを語るのを禁じている。聖典はアラビア語であり、理解することができない。理解できないことを信じることは困難である。本来唯一神は、「人間」を兄弟姉妹として仲良くさせなくてはならないのに、イスラム教のあり方は、それをむしろ阻んでいる。教会が異なるというだけで、人間の間に壁を作り、相互の愛で満たさなければならないのに、憎しみを生み出している (Kartini 1964: 44-45) と述べている。彼女はここで、教会 *kerk* という言葉を用い、キリスト教の唯一神にも疑問を投げかけているように思われる。明らかに、様々なキリスト教宗派の分離対立も視野に入れ、現行の一神教のあり方から、イスラム教を相対化し、イスラム教徒とキリスト教徒の対立も、一神教間の様々な対立の一つとして相対化している。

彼女の読んでいた活字媒体にもキリスト教に関するものがかなり見受けられ、キリスト教にも興味を持っていたことがうかがわれる (富永 1991)。また文通相手の一人アドリアニ N. Adriani は、プロテスタントの牧師でもあり、聖書翻訳のためにトラジャの言語と文化を研究していた。翻訳という相対化の視点を多分に要求される仕事に携わる彼から、文化や言語だけでなく、宗教も相対化しうのような視点を得ていたのではないと思われる。また、彼女の手紙のなかには、「神 God に感謝を」といった感嘆詞が多く含まれていることから、神の存在を身近に感じていたことが推測される。しかも、それらの手紙がすべてヨーロッパ人に宛てたものであることから、この神は、イスラムの神でもキリスト教の神でもあり、同時にいずれでもないような神と考えられていたのではないだろうか。

土屋は、カルティニにおける心象風景の誕生を考察するなかで、彼女が抱いていた神性に、神智学の神性を見出している。彼女は、手紙のなかで彼女のくらすジャパラの海岸の美しさを次のように語っている。

クレイン・スハーフェニンヘンにあって、すべてが静謐で平和で詩的であり、また太陽がこの上なく美しく沈んでゆく、その夢のような海辺を目の前にするとき、わたしどもによく見える目が授けられていることに対する感謝の念はいやまざるのです。そしてまた、見渡す限り、天にまで至る漣に不思議な輝きと色紋とが広がるのを目にして、森羅万象（het Al）を形作りこれを統べている不可視の偉大な精神（Onzienlijk Groten Geest）への感謝の念がわきおこるのです……。

スハーフェニンヘンはオランダの有名な海岸である。それに「小さい」を意味するクレインを冠して、ジャパラの海岸を示している。これにより、スハーフェニンヘンもジャパラの海岸も森羅万象の一つとなる。この「不可視の偉大な精神」を、イスラムの神やキリスト教の神の基底に存在する普遍的な「神性」と同定し、神智学 Theosophy における「神性」とほとんど同義のものと、土屋は位置付けている（土屋 1984： 65）。

「不可視の偉大な精神」という主知主義的な普遍の神性という回路のほかに、カルティニは、当時ヨーロッパで流行っていた降霊術と、ジャワ神秘主義をつなぐ、神秘主義的な回路を通じてヨーロッパ世界とつながる。彼女はオランダ社会民主党の党首であったファン・コルから習った。神智学もまた、その一部として降霊術を擁していた。ファン・コル自身、ヨーロッパの降霊術と同様ジャワ神秘主義にも、興味を持った。カルティニは、死者の霊の降霊に熱中し、それを手紙に記している（Pramoedya 1962： 231–233； Geertz 1964： 17–18； 永積 1980： 84–90）。

カルティニが生きた時代を論じた際に、オランダによる植民地化の確立される過程は、崇高なる呪術性が政治的軍事的中心から排除される過程であった、と第一章で述べた。カルティニが信奉した西洋近代の解放思想は、そのような政治軍事的中心を前提としている。にもかかわらず、神性や降霊といった、崇高なる呪術性に通じる宗教的土壌が、カルティニの世界には息づいている。これは、当時のヨーロッパ世界においても、やや周辺的な形ではあるが、神智学、フリーメーソン、降霊術という形をとって息づいていた。カルティニのすぐ上の兄ソスロカルトノは、1896年からオランダで言語学や文学を修め、ウイーンで知識人として暮らした後、1925年にジャワにもどり、ジャワの「伝統的」祈祷師になり活躍した。政治軍事という近代統治の中心からは、排除されたかに見える神性／神秘性は、別の水準で息づいていたのである。

以上のような視点からとらえると、カルティニは、近代と伝統、西洋とジャワ（東インド）、合理性と宗教性（呪術性）といった事柄が錯綜した関係を織りなす場で、ジャワ（東インド）女性とジャワ（東インド）民族の解放思想をはぐくんでいたことになる。

第3章 ロマンチック・ラブとセクシュアリティをめぐる思想と実践

カルティニは、ジャワ（または東インド）でのロマンチック・ラブの不可能性を繰り返し、手紙のなかで叫ぶ。不可能である理由は、第一に、面識もない男性と結婚を余儀なくされるジャワ・プ

リアイ（貴族）の結婚制度のなかに見出され、その痛烈な批判を表明する。

愛！この地で愛について何がわかるでしょう。全く知らない男性をどうやったら愛せるでしょう？そしてその人は私たち女性をどうやって愛することができるでしょう？それは本質的に不可能なことです。若い女性たちと男性たちは、厳格に分離され、そして出会うことは決して許されないのですから（Kartini 1964： 31）。

また、恋愛の不可能性の指摘は、一夫多妻を許しているイスラム法への批判となっている。

私は、決して、間違っても恋に落ちることはないでしょう。愛するためには、第一に尊敬がなければならないと私は思います。私は、ジャワの若い男性を全く尊敬することができません。すでに結婚して父親であるのに、自分の子供たちの母親である人に飽きたら、別の女性を家にいれ、しかもイスラム法に従って、その新しい女性と法的な結婚をするような人をどういったら尊敬できでしょうか。（Kartini 1964： 41）

男女交際の必要性を述べてはいるものの、カルティニが、性について明示的に語ることはない。婚前閉居、女性が公衆の面前に姿を現すことの禁止、単独で旅をすることの禁止、名前が印刷物に現れることの回避などは明らかに若い女性の性的側面の囲い込みと関係している。しかし、その点を指摘して、性の解放を謳うことをカルティニはしない。男性が、複数の妻を持つこと、婚外の女性をもつことに対して憤りを表現するが、それを性的ダブル・スタンダードとして糾弾することをしない。「オランダ人の結婚相手を見つけようとしているふしだらな女性である」という批判をジャワ人およびオランダ人の保守層から受けるという苦境にあるときにも、性的自由を主張して、批判を跳ね返すような行動をすることはない。彼女が読んだ書籍、雑誌、新聞のなかには、性に触れたものもあったが、それについて彼女が語ることはない。カルティニ自身も自らを「新しい女」と位置付けていたが、性に関するこのような沈黙は、平塚をはじめとした日本の「新しい女」と対照的である。女性が性について語ることを禁じるプリヤイの文化、人種および民族の境界を侵犯する可能性を孕む性的自由に対する植民地体制による警戒など、ヘゲモニーの問題と深くかかわることは確かであろう¹⁵⁾が、性に関するヘゲモニーに対峙することをカルティニが避けたのは、もう一つの沈黙を余儀なくさせている彼女固有の状況と深くかかわっているであろう。

もう一つの沈黙とは、カルティニの産みの母親に関する沈黙である。彼女の父親は、若い時に、平民の女性ンガシラを側室としている。彼女自身その女性から生まれたことは、知っていた。プラムディアは、ンガシラがその父の屋敷内の一角に暮らしていたのではないかと推測しているが、彼女の詳細についてはわかっていない。さらに、プラムディアは、平民のンガシラを側室とした理由は「魅力的 *cantik* であった、美しい身体をしていたから（Pramoedya 1962： 33）」としている。一般に、平民の側室を娶る場合、性的な魅力も含めた「魅力」が要因となっていたと考えるのは妥当であろう。手紙の中でカルティニが「母」と呼ぶのは、王家に連なる、正妻である。他人の生んだ子供の面倒を見なければならない「母」の苦労を思いやる記述はあるが、自分が産んだ子を他人に託したンガシラの苦悩を慮る記述はない。平民側室を母親とすることは、周知のことであり、カル

ティニを不利な立場に置いたことは全くなかったことが、手紙から推測される。それにもかかわらず、産みの母には全く言及しない。これは、ジャワ・プリアイの一夫多妻制や、側室を囲うことを激しく糾弾するが、父が産みの母を側室としたことに対しては、批判のにおいを漂わせることもないことと符合している。彼女のセクシュアリティに対する沈黙は、こういった一連のことがらに関係している。

ジャワ・プリアイ社会の位階体制を糾弾しながらも、父との関係に疑問を投げかけることをしないカルティニは、一夫多妻制や側室を囲うことを糾弾しても、父が側室をもったことに対しては沈黙する。一夫多妻婚がもたらした女性の悲しみへの共感を激しい口調で述べることはあっても、産みの母親に関しては沈黙する。カルティニの思想や行動が、父との関係に収斂するわけでもないし、父との関係も、文化や当時の植民地状況の関数と考えることもできるであろう。けれども、彼女の思想と行動を方向づける上において父親との関係は、もっとも重要な要因をなしていたと判断できる。

手紙を読む限り、カルティニは、ロマンチック・ラブの実践者ではなかった。けれども、手紙には愛という言葉があふれている。父への愛を語るばあいも多い。それだけでなく、文通相手の女性に向けられている場合も多い。時には、単なる常套句の域を超えて、ラブレターかと思まごうような文章がつづられていることもまれではない。彼女の「愛」は、性器的なものではないが、エロティシズムを漂わせている。社会的な非難にさらされながら自らの思想の承認を得るという関係において、平塚と『青鞥』の挿絵をかいていた尾竹紅吉という女性画家の間に、同性愛関係があったように、カルティニが、自らの思想のほとんど唯一の承認者である、ヨーロッパ人の手紙の受け取り手に対して、エロティックな心情を抱いたとしても、不思議ではない。それが、たとえ、解放されるべきジャワ（東インド）の女性にとって、他者であり、支配者であったとしても。

第4章 家族をめぐる思想と実践

では、カルティニは、家族に関してどのような思想を持っていたのであろうか。「家族」にあたるような集団や「家庭」にあたるような人間関係の場については、明確には語っていない。彼女の知りうるジャワ・プリアイや、植民地政府の高官たちは、多くの使用人と共に広い屋敷にくらしていたであろう (Breton de Nijs 1973)。プラムディアが指摘するように、プリアイは、親戚の者たちや側室も一緒に暮らしていたであろう。ゼヘレンの調査によると、カルティニには、幼い時から彼女や妹たちの世話を親身に行っていたラミという使用人がいたが、彼女については、ンガシラ同様、カルティニは一度も言及していない (Zeggelen 1960; Pramoedya 1962: 33)。カルティニには、同母および異母兄弟姉妹が10人いた。年齢順で言えば、彼女が5番目の子供である (Pramodya 1961: 27; Cote 1992: xxxiii)。彼女は、父とその正妻とこれらの子供たち全体を一つの集団として語ることはない。父母と兄弟姉妹に関しては、称賛や不満が語られ、そこからカルティニの抱く理想を読み取ることができる。

夫婦は一夫一妻制に従い、男性は婚外の女性をもたないというのが彼女の女性解放思想の重要なテーマとなっていた。ヨーロッパ人の夫婦の関係が、あるべき姿を形成するうえでかなりの影響を持ったことも手紙からうかがえる。ジャワ・プリアイの一夫多妻や側室の慣習には、憤りを感じ、変革されなくてはならないと繰り返し語っていたが、自分の父母の関係に関しては沈黙している。

彼女の理想の父親像は、彼女自身の父や父方祖父のように、社会において尊敬され、よき指導者であり、子供たちにオランダの教育を受けさせることに積極的であるというものだ。さらに手紙のなかで、終始一貫して、父から自分への愛を称賛し、父への愛を語ってやまない。正妻であり王族と近縁の「母」については、その冷たさと旧弊をもって接する態度に、かなり不満を持っていたようである。「私がこれほど父を愛してなかったら、「母」のことは受け入れられない」と語っていた。しかし、病に伏した幼い弟の看病に身を挺している「母」を目の当たりにして、その「母性」ゆえに、尊敬と親愛の情を抱くようになる（Kartini 1964: 78）。この段階で彼女は、母であることに大きな価値を見出すことになる。兄弟姉妹に関しては、兄と姉たち、すぐ下の妹二人、3歳で亡くなった弟について言及がある。ジャワ・プリアイ社会には、位階の上の者に対して、厳密な尊敬語を用い、身を低くしなければいけないなど厳しい態度の規則がある。これらの規則は、政治的位階上位者だけではなく、父母や兄姉も含め、上の世代の者、年長者に対しても適用される。カルティニは、父母と子供たちの関係が対等であるべきで、これらの厳密なふるまいの規則の適用をやめべきだとは考えていなかったが、兄弟姉妹間に関しては、適用をやめるべきだと主張していた。同父母の兄スロカルトノを除き、規則にのっとったふるまいを当然とする兄姉たちに、カルティニは反感をもち、苦渋に満ちた関係をもっていた。それと対照的に、スロカルトノに対しては、一貫して親愛の情を抱いていた。すでに触れたようにすぐ下の二人の妹たちとの間に、平等で親密な関係をもつことにより、兄弟姉妹に関する彼女の理想を実現した。三姉妹間では、通常ならば課せられる態度の規則に従わず、同じ部屋で寝起きし、多くの事柄に関して行動を共にした。これらのことは、当時のジャワ・プリアイ社会では、例外であり、常識を逸したものであった。しかしながら、これが可能になったのは、カルティニの姉としての権限によってであるというパラドクスを孕んでいた。

既に述べたように、カルティニは、それまで拒否していた結婚という苦渋の決断をする。相手は、妻に先立たれた男性。プリアイで、父と同じように県知事という植民地官吏の地位にあった。苦渋の選択ではあったが、カルティニは、先妻の遺した子供たちの「母」になることに希望を託して嫁いだ。単婚を信奉する進歩的な男性という点が、結婚を了承する重要な条件であったが、結婚後に、夫に婚外の女性がいることを知る。この時点で彼女にとって、母であることだけが、新しい場所で希望と理想をつなぐものとなった。カルティニは、1904年に、出産後四日目に25歳でその一生を閉じた。

当時、プリアイ社会だけでなく、ジャワ全体にどれくらい一夫多妻婚が行われていたのかに関しては、さらなる研究が必要であるが、カルティニの夫婦関係、親子関係および兄弟姉妹関係の理想像は、プリアイ社会の慣習を背景として、それに抗する形で形作られた。この理想像は、彼女の開設した女子教育のための私塾が、プリアイの娘たちだけを対象にしていたのと同じように、社会階層の限定を伴ったものであった。また、彼女のおかれた当時の社会的コンテキストのなかで、夫婦とその子供たちからなる家族と、彼らが相互に情緒的で親密な関係をはぐくむ閉じた空間としての家庭は、未だ意味を持つものではなかった。彼女の暮らした屋敷は、父によって多くの一族郎党が統率された社会空間であり、社会全体の位階制を支える振る舞いの体系がその外側の空間と同じように働いていた。婚前閉居を可能にするような閉じた空間ではあったが、父の統率のもとに、政治的に重要な人物たちが、招き入れられる社会空間であった。親密圏と公共圏は明確に分けられてい

なかったといえよう。カルティニがことさら「母性」の重要性を見出し、一般の社会の長幼の序とは異なる兄弟姉妹関係を求めていることから、西洋近代の家族の理想の影響のもとにあったと推測できるが、その点に関してはさらなる研究が必要であろう。

結 語

以上、カルティニの生きた時代および彼女が生きた場について明らかにしたあと、ロマンチック・ラブと家族をめぐる彼女の思想と実践について考察を加えた。カルティニに関する研究は数多くあるが、平塚との比較のまなざしを常に持ちながら、歴史人類学（社会学）的考察を加えた点に、本稿の独自性があるといってもいいかもしれない。桑原論文と対比的に読むと、同時代に生き、西洋の解放思想の影響のもとに思想形成と実践を目指していたという点については共通しているものの、日本とジャワ（インドネシア）の文化的歴史的背景の違い、とくに植民地化の有無によって、彼女たちの思想形成のプロセスと行動の形が大きくことなることが理解できると思う。プラムディアは、カルティニが平民の母を持っていたことが、一般民衆への共感と民族意識を形成するうえで、重要であったと述べている（Pramoedya 1962）。彼女が民衆への興味を持とうとしていたのは確かであるが、産みの母に対する沈黙からすると、プラムディアのように考えることには無理であろう。また、彼女のジャワ女性の解放思想の聞き手が、同じジャワ・プリアイの女性、ましてやジャワの民衆ではなく、抵抗の対象になるかも知れない、オランダ植民地政府側の人々であり、使用言語もオランダ語であったことも、彼女のおかれた限界を示しているといったほうがより適切であろう（Taylor 1989）。本稿は、彼女の限界と同時に、限界のなかでの彼女の生の意義を示せたと願う。

また、カルティニの歴史的時代を位置付ける際に、さらにジャワ（東インド）女性の解放の思想の形成と実践を明らかにする際に、近代と伝統、西洋とジャワ、社会と個人、権力と愛が、単純に異質で対立するものではなく、相関し、融合し、矛盾しながらも共存していることを明らかにした点も、多少なりとも独自である。近代を考える上で常に大きな問題であり、ことに、最近の原理主義、宗教対立、再魔術化、呪術化の問題にとっても重要な、近代的合理性と神性・神秘性の関係の視点から考察している点にも、独自性があると思っている。東インド全体のマクロな水準と、カルティニの生活空間に焦点を当てたミクロな水準において、いずれも近代的合理性が神性・神秘性を駆逐するという形にはなっていないこと、あるいは、近代的統治の中心において、その合理性に対立するものとして排除され駆逐されたと見える崇高な呪術性は、人々の生活の場では、西洋近代性と共存し、力を持ち続けていたことを指摘することができた。

本稿の目的である、カルティニの生きた時代のインドネシアにおけるロマンチック・ラブと近代家族の考察をより推し進めるためには、カルティニの書簡集だけでなく、様々な歴史的記録を活用する必要がある。また、本稿の独自性をさらに発展させて、ロマンチック・ラブと近代家族についての考察を展開していくには、カルティニの書簡集にもあふれている「愛」を祖上に載せることが重要であると思われる。第二波フェミニストは、ロマンチック・ラブを政治的イデオロギーと位置付ける。人々、特に、女性たちをとらえて、そこに崇高性を認めさせるイデオロギーであるという点において、批判的な意味を込めて、「神話」という用語がつかわれることもある。この「崇高性」と「神話」を、批判としてではなく、字義通りに位置付けることによって、新たな研究の視野

が開けてくるのではないかというのが、平塚とカルティニの比較研究の今後の方向性となると筆者は考えている。自らの生命を捧げることも辞さないナショナリズムのありようが、宗教と似ていることはよく指摘されることである。私的な愛とナショナリズムを、本稿で扱った神性・神秘性と崇高なる呪術性と対置してみるとその並行性が明らかになるであろう。

本稿は、アジアの一地域の先駆的フェミニスト、カルティニの生を、アジアのもう一つの地域で同時代を生きた平塚のそれと対比のまなざしのもとに考察するという目的の幾分かは果たせたとおもう。実証性を高めると同時に、上記のような理論的枠組みから研究をすすめることを今後の展望として、結びとしたい。

注

- 1) 桑原桃音と青木恵理子は、それぞれ日本とインドネシアを研究対象とし、いずれもジェンダーおよび家族を中心的なテーマの一つとして研究を続けてきた。2010年度に、龍谷大学国際社会文化研究所から助成金を授与され、本稿のための研究を進めた。また、2011年度は龍谷大学在外研究員としてオランダで研修した。本稿はその成果でもある。オランダでの資料の閲覧および本稿の執筆に際しては、KITLV（王立民族学研究所）およびIIAS（国際アジア研究所）にお世話になった。ここに記して、謝意を表したい。
- 2) 切実という評価は主観的判断に過ぎないかも知れないが、若き日の彼女たちが残したものは、そのような評価をせざるを得ないような迫力をもっている。
- 3) ジャワ戦争（1825年から1830年）、スマトラにおけるパドリ戦争（1821年から1838年）、カリマンタンにおけるバンジャルマシン戦争（1859年から1863年）など。Ricklefs 1991 参照。
- 4) Vickers 2005 参照。モルッカのティドレ・イスラム王国の場合ように、対抗現地勢力を弱体化させるためにオランダ軍勢力が利用される場合もあった。
- 5) その議論は、文化人類学以外にも多くの影響をあたえた。日本など近代的な国家に対してもこの概念を用いるような社会科学的研究が現れた。たとえば矢野暢は、ギアツの影響を受け、*Negara* 出版の2年後に、『劇場国家日本——日本はシナリオをつくれるか』（1982）を書いている。しかしながら、矢野の使う「劇場国家」という概念は、ギアツの議論の核心を踏まえたものとはなっていない。
- 6) 筆者が調査した、東インドネシア・フローレス島の中部山岳地域においては、1907年にオランダ人の軍事的遠征がなされた。それについて、年配の村人たちは、「世界の中心であり、彼ら自らの生命の起源である、我々を攻撃するとは、なんとおろかなことか」と述べ、当時唱えられたと言われる呪詛の詩文を唱えた（青木 2002）。フローレス島も、20世紀初期以降オランダ植民地政府の、20世紀半ば以降インドネシア共和国の行政組織に繰り込まれていったが、崇高な呪術は人々の生活に継続的にみられる。多くの民族誌的報告は、村落レベルでの崇高な呪術の継続をしめしている。
- 7) ジャワにおいて鉄道網が整備された時期は、日本におけるそれと重なる。
- 8) 10人は以下のとおりである。①J. H. Abendanon、②その妻 R. M. Abendanon-Mandri、③彼らの息子、④N. Adriani（1894年にオランダ聖書協会から派遣され、スラウェシのトラジャの言語と文化を研究した。）、⑤G. K. Anton（オランダ人妻を同伴してカルティニの住むJepara県を訪れたときに知り合った、イエナ大学の国際法と政治学の教授であるドイツ人）、⑥H. G. de Booy-Boissevain（総督付副官の妻であり、その後カルティニ基金を1913年に設立）、⑦H. N. van Kol（1976年から16年間技師としてジャワに滞在し、帰国後、社会民主労働党SDAPメンバーとして国会議員。彼の影響でカルティニは降霊をするようになった。）、⑧Van Kol氏の妻Nellie（作家、オランダの女性雑誌*De Vrouw*、子供雑誌*Ons Blaadje*の編集者）、⑨M. C. E. Ovink-Soer（Jeparaの副理事官の妻、作家。カルティニの愛読誌でもあったオランダの女性雑誌『オランダのゆり』に記事を連載）、⑩E. H. Zeehandelaar（カルティニは手紙のなかでステラと呼んでいる。『オランダのゆり』でカルティニがペンパルを募集し、それに彼女が答えて文通が始まった。社会主義とフェミニズムを信奉していたカルティニと同年代のアムステルダム在住の女性。）（富永 1991：35）。
- 9) 彼は、カルティニと面識があり、東インドにおける女子教育推進のためにカルティニに重要な役割を担ってほしいと思っていた。アベンダノン氏は、カルティニがすでに彼女の居住地域の産業として推進していた、木彫の納入相手でもあった。また、彼のスペイン人の妻（R. M. Abendanon-Mandri）に対して、多

くの手紙をカルティニは書いていた。それらの多くは、「愛しのお母様」という呼びかけではじまることから、20歳ほど年長のアベンダノン夫人に対してカルティニは特別な親近感を抱いていたと思われる。植民地時代に出版されたオランダ語のままの書簡集と独立以降に出版されたインドネシア語訳の書簡集は、さまざまな政治的政策的な意図から編集が加えられていた。また、彼女の死後それほど年限の経っていない時期には、手紙に登場する同時代の人々の名誉や人間関係への配慮からも、書簡集には編集が加えられた。1911年にアベンダノン氏によって出版された書簡集は、双方の点から、かなりの編集がなされていた。この出版の主たる目的は、1901年から施行された倫理政策および現地人官吏の娘たちの近代的学校教育の妥当性をアピールし、東インドにおける女子教育の推進に対してオランダ政府と世論の支持を確立することであったという理解が、研究者の間で一般的である。しかしながら、本稿では、編集の問題の詳細には立ち入らない。

- 10) カルティニのこと。ジャワでは、名前の最後の一音節を長母音化して呼び名として用いる。
- 11) *Ibuisism*。インドネシア語で母を意味する *ibu* という語から、スハルト政権下の女性政策に対して批判的なまなざしを向けるインドネシア研究者たちによって作られた分析的記述用語。
- 12) 土屋 1984, 1991, 米地・増子 2004 参照。
- 13) 第一章参照。
- 14) Tsuchiya 1990, 1991.
- 15) 当時女性が性的に民族の境界を超えることは、オランダ人側からも現地社会からも嫌悪され忌避される傾向にあった (Stoler 1995, 2002; 土屋 1991 参照)。

参考文献

日本語

- 青木恵理子 1986「始原の樹幹なる『母』深淵の樹根なる『父』：中部フローレスにおける親族のアイデオロギーと集団及び関係の形成」『民族学研究』51巻2号：168-190.
- 青木恵理子 2002「フローレス島におけるカトリックへの「改宗」と実践」寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』pp.259-302. めこん
- 白石隆 1996「インドネシア近代における「わたし」：カルティニの *ik* とスワルディの *saya* (〈特集〉インドネシアの国民の形成：故土屋健治教授を偲んで)
- 土屋健治 1984「カルティニの心象風景」東南アジア研究 22(1)：53-74.
- 土屋健治 1991『カルティニの風景』めこん
- 富永康代 1991「カルティニの『世界認識』の形成過程——カルティニの読書体験についての一考察」『南方文化』18：33-55.
- 富永康代 1993「カルティニの著作と追悼記事について——19世紀末ジャワとオランダにおいてカルティニはどのように認識されていたのか」史林 76(4)：608-626.
- 永積昭 1980『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会
- 矢野暢 1982『劇場国家日本——日本はシナリオをつくれるか』TBS ブリタニカ
- 米地文夫・増子義孝 2004「アジア・ナショナリズムの勃興期における景観の役割：志賀重昂『日本風景論』と土屋健治『カルティニの風景』との視座の比較」総合政策 5(1)：119-135.

外国語

- Aoki, Eriko 1996 *Piercing the Sky, Cutting the Earth: the Poetics of Knowledge and the Paradox of Power among the Wologai of Central Flores*. Ph. D. thesis.
- Breton de Nijs, E. 1973 *Tempo Doeloe: Fotografische Documenten uit het Oude Indie, 1870-1914*. Amsterdam: Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- Cote, Joost 1992 'Introduction', in *Letters from Kartini: An Indonesian Feminist, 1900-1904*, translated by Cote, Joost, pp.vii-xxxii. Clayton: Centre of Southeast Asian Studies.
- Fox, James J. 1980 *Obligation and Alliance: State Structure and Moiety Organization in Thie, Roti*. In *The Flow of Life: Essays on Eastern Indonesia*. J. J. Fox (ed.), pp.98-133. Cambridge, Mass. and London: Cambridge University Press.
- Geertz, Clifford 1980 *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. Prinstone: Princeton University Press.
- Geertz, Hildred 1964 'Introduction', in *Kartini Letters of a Javanese Princess*, translated by Symmers, Agnes Louise,

- pp.7–26. New York : the Norton Library.
- Kartini 1964 *Letters of a Javanese Princess*, translated by Symmers, Agnes Louise, pp.7–26. New York : the Norton Library.
- Kartini 1987 *Brieven aan Mevrouw R. M. Abendanon-Mandari en haar Echtgenoot*, Dordrecht & Providence : Foris Publication.
- Kartini 1992 *Letters from Kartini : An Indonesian Feminist, 1900–1904*, translated by Cote, Joost. Clayton : Centre of Southeast Asian Studies.
- Pramoedya Ananta Toer 1962 [2000] *Panggil Aku Kartini Saja*. Jakarta : Hasta Mitra.
- Raden Ajeng Kartini and Jean Taylor 1974 'Educate the Javanese,' *Indonesia*, Vol.17 : pp.83–98.
- Reitsma, S. A. ed. 1925 *Gedenkboek der Staatsspoor- en Tramwegen in Nederlandsch-Indie*. Weltevreden : Topografische Inrichting.
- Ricklefs, M. C. 1991 *A Modern History of Indonesia*, MacMillan.
- Stoler, Ann Laura 1995 *Race and the Education of Desire : Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*. Duke University Press.
- Stoler, Ann Laura 2002 *Carnal Knowledge and Imperial power : Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley and Los Angeles : University California Press.
- Sutherland, Heather 1979 *The Making of a Bureaucratic Elite : The Colonial Transformations of the Javanese Priyayi*. Kuara Lunpur ; Hongkong : HEB.
- Taylor, Jean 1989 'Kartini in her historical context,' *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 145 no : 2/3, 295–307
- Tsuchiya, Kenji 1990 'Reading Cerita Nyai Dasima published in 1896, Batavia', in Silva et al. eds. *Asian Panorama : Essays in Asian History, Past and Present*. pp.75–88. New Delhi : Vikas Publishing House.
- Tsuchiya, Kenji 1991 'Popular Literature and Colonial Society in Late-Nineteen-Century Java — *Cerita Nyai Dasima*, the Macabre Story of an Englishman's Concubine. *Tonan Asia Kenkyu* 28(4) : 17–30.
- Vickers, Adrian 2005 *A History of Modern Indonesia*. Cambridge University Press.
- Zeggelen, Marie C. van 1960 'Sekelumit Dari Kehidupan R. A. Kartini', *Bintang Minggu* 13 Maret.